
とある魔術とフロンティア

ぱっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術とフロンティア

【Nコード】

N6725L

【作者名】

ぱっつあん

【あらすじ】

これは幻想殺しと禁書目録が会う三年前の話である。

学園都市に突如現れた電子生命体
ーデジタルモンスター略してデジモンからとある人を守るため伝説
の十闘士の一人の炎の闘士【神原拓也】が再び立ち上がった。

魔術と炎の闘士が交わるとき物語は始
まる

第一話【復活】（前書き）

この小説は主にデジモンフロンティアが中心です。

それでも良い人は

【スタートしますか？ しませんか？】

第一話【復活】

デジタルワールドをルーチェモンの魔の手から救ってから既に二年の月日経っていた。

デジタルワールドを救った六人の戦士達は今は普通の暮らしをしている。

彼等の持っていたDスキャナー、デジヴァイスは元のケータイの姿に戻り十闘士への進化する方法はなくなっていた。

しかし彼等がいる人間界にデジモンが現れることはないはずなので十闘士の力は必要なかった。

そして炎のスピリットの力を受け継いだ少年【神原拓也】は中学一年生になっていた。

拓也が通っているのは柵川中学校と言う学校だ。

この柵川中学校は学園都市と呼ばれる学生が230万人の内の八割を占める都市の一つだ。

この学園都市は中と外に分かれ中と外では科学が二十年から三十年の差があるらしい。

学園都市では能力開発と呼ばれる超能力者を作り出すためのカリキュラムが組まれている。

そして

無能力者（LEVEL0）
低能力者（LEVEL1）
異能力者（LEVEL2）
高能力者（LEVEL3）
大能力者（LEVEL4）
超能力者（LEVEL5）
の五段階で構成されている。

そして無能力者は学生の六割がそれにあたる。

ちなみに拓也も無能力者だった。

「はあ…またLEVEL0かよ…」

拓也は学校の教室でため息をつきシステムスキンの結果にうなだれていた。

システムスキンと言うのは学生のLEVELを計るための行事である。

ちなみに今の学園都市にはLEVEL5が五人しかいない。

だからと言って拓也がLEVEL0と言う事実は変わるわけではない。

「なんだ拓也？またLEVEL0か？」

この少年は中学に入ってから知り合い今まで同じクラスだった悪友
ほんじょうからき
【本城唐木】だった。

こいつは柵川の三バカの一人に数えられるほど有名だ。

主に変な意味で…

ちなみにLEVEL2の【バイオネキスト発火能力】だ。

「そんな事言うなよ可哀想だろ？」

この少年は【さいきかつぎ債鬼香月】

こいつも柵川の三バカに数えられる一人だ。

能力は【風使い（エアロマスター）】だ。

LEVEL1の能力者だ。

しかしこの二人は拓也から見たら憧れの的だった。

能力に関してだけ…

ちなみに最後の柵川の三バカは拓也である。

だがこの三バカはバカで有名だが顔立ちは上の中と同じかそれ以上だろう。

しかしその事に三人は気づいていない。

「うるさいな俺だっていつか能力者に!!」

「「無理無理」」

二人にあっさりと言われてしまい拓也はショックを受けていた。

しかし拓也がスピリットの力を失っていなければ確実にLEVEL 4以上の力はあるだろう。

「それより遊びに行かね？」

学校も終わったため拓也達は遊びに行くことにした。

学園都市のゲーセンもハイテクなのだ。

そしてゲーセンに向かうために歩いていると本城がいきなり話題をふってきた。

「そう言えば最近未確認生命体が出てるって話だよな？」

「それ知ってる!!」

しかし拓也はスポーツニュースしか見ないため知らなかった。

するといきなり近くで爆発が起こった。

「何だ!？」

拓也達が爆発したところをとっさに見た。

すると拓也には信じられない光景が広がっていた。

黒い体に巨大な恐竜みたいな外見の怪物がいたのだ。

それは拓也がよくしる生き物だった。

（なんで人間界にデジモンが！？）

出てきた生き物はデジタルワールドにいるはずの生き物のデジモンだった。

拓也達はとりあえずデジモンから逃げることにした。

そして今の拓也にデジモンと戦う力はないのだ。

（くそ！！どうすれば！？）

拓也は逃げながらも考えた。

すると拓也のケータイに着信がきた。

開くとそこにはこう書かれていた。

【スタートしますか？しませんか？】

この文章は拓也がデジタルワールドに行くきっかけになった文章だった。

（きまってるさ！）

拓也は迷わずスタートしますを選んだ。

その瞬間拓也のケータイがデジヴァイスに変わった。

デザインも昔のままだった。

「再び戦ってくれるのですね？」

デジヴァイスから女性の声が聞こえた。

この声はオフアニモンの言うデジモンの声だ。

以前に拓也達を導いたデジモンだ。

「当たり前だ！」

「スピリット達は前と同じであなたに力を貸すでしょう」

オフアニモンはそれだけを言うと言信を切った。

そして拓也はデジヴァイスを片手にデジモンに向かっていった。

デジモンの名前はダークティラノモンと言う完全体のデジモンだ。

デジモンの階級は

幼年期

成長期

成熟期

完全体

究極体

の五つに分けられる。

ダークティラノモンはかなり強い方に入るデジモンだった。

そしてそんなダークティラノモンを倒すためにアンチスキルが交戦していた。

しかし全く歯が立たない。

（久しぶりだな…早速行くぜ！！）

拓也の手にバーコードが現れた。

「スピリット・レボリユーション！！」

拓也のかけ声と共に拓也の体をバーコードの球体が囲むように現れた。

そしてバーコードの球体が晴れるとそこには拓也の姿はなかった。

そこに立っていたのは黄色の髪に赤の鎧をまとった魔神がいた。

「アグニモン！！」

これは拓也がスピリットを使って進化した炎の闘士【アグニモン】の姿だった。

この姿はヒューマン体と呼ばれる人型の姿だ。

もう一つの姿がビースト体と呼ばれる獣の姿だ。

「撃つじゃん！！」

アンチスキルの黄泉川が叫んだ。

そしてその瞬間、ダークティラノモンの尾が黄泉川に振るわれた。

しかし黄泉川の前にアグニモンが割って入り黄泉川を守った。

「大丈夫か？」

黄泉川はダークティラノモンと同じデジモンに守られた事に驚いていた。

アグニモンはダークティラノモンの尾を弾き飛ばし跳躍した。

そしてアグニモンの腕から炎が出てきた。

「バーニング・サラマンダアアア！！」

アグニモンの腕から出ていた炎をダークティラノモンに向かって放った。

ダークティラノモンはそれを食らいよろめいたが決定打にはならな
い。

アグニモン立って続けに技を放った。

「ファイヤーダーツ！！」

アグニモンの手の甲から発生した炎をスライドしてダークティラノ
モンにダーツのように炎を放った。

しかし今度の攻撃は全く聞いていない。

「グオオオオオオオ！！」

ダークティラノモンはアグニモンに向かって炎を吐いた。

アグニモンは二年のブランクがあったため完全に避けきることが出来ず左手が巻き込まれた。

「ガアアアア！？」

アグニモンはその場にうずくまり腕を動かした。

炎の闘士のアグニモンの腕を火傷させていた。

（二年も空くと動きが鈍くなってやがる…）

アグニモンは立ち上がり再びダークティラノモンの前に立ちはだかった。

体の大きさは見て分かるほどの差があった。

しかしアグニモンは諦めなかった。

「お前早く逃げるじゃん！！」

黄泉川がアグニモンを庇うように前に出た。

「早く逃げろ！ここは俺に任せろ！！」

アグニモンが黄泉川に叫ぶが全くどうとしない。

「子供を守るのが大人の仕事じゃんよ!!」

黄泉川はアグニモンが拓也であることをしらない。

しかしアンチスキルとしてどこの誰かも分からない怪物を守ろうとしているのだ。

そんな黄泉川とアグニモンに向かってダークティラノモンは尾を叩きつけてきた。

「危ない!？」

アグニモンは黄泉川を抱きかかえ回避した。

「あんたはここにいろ!!」

黄泉川を安全なところまで連れて行きアグニモンはダークティラノモンに向かって走り出した。

そしてアグニモンは回転し始めた。

するとアグニモンを中心とした炎の竜巻が発生しダークティラノモンに向かっていく。

「サラマンダアア……」

アグニモンが炎の竜巻から現れた。

「ブレイクウウ!!」

アグニモンは回転していた勢いを使いそのままダークティラノモンに回し蹴りを放った。

ダークティラノモンの顔にアグニモンの必殺技が直撃した。

ダークティラノモンはアグニモンの必殺技を食らい倒れた。

その瞬間ダークティラノモンからバーコードが出てきた。

「デジコードスキャン!!」

アグニモンが持っていたデジヴァイスにダークティラノモンのバーコードが吸収されていた。

そして全てのバーコードを取り込まれたダークティラノモンは卵になりどこかへ飛んでいってしまった。

「はあはあ…さすがにきついな…」

アグニモンは久しぶりに戦い体力を消耗していた。

そしてアグニモンはそのまま進化を解こうとして止めた。

アグニモンの後ろにアンチスキルの黄泉川が立っていたからだ。

「お前は何者じゃん？」

黄泉川は特に銃を構えることもなくアグニモンの目を見据えて言った。

「……さあな？」

アグニモンは黄泉川にそう言いビルの上を移動して黄泉川から離れた。

そして黄泉川から大分離れ人目のないところに移動してアグニモンから拓也に戻った。

「バラすわけにはいかないからな…」

拓也はそう呟きとあることに気づいた。

人が誰もいなかったのだ。

拓也が人目のないところを選んだのもそうだがそれ以上におかしかった。

人がいないどころか車なども全くない。

拓也以外の存在がいなかったのだ。

「どうなってやがんだ!？」

拓也が驚き周りを見渡した。

そして一人の人を見つけた。

その女性はTシャツを胸の下で結びジーンズの片方の部分が切り取られていた。

髪型はポニーテールで大人っぽい雰囲気をもった女性だった。しかしその女性は2 m程もあるバカでかい日本刀を携えていた。その出で立ちからは熟練の戦闘者を感じさせた。

「お前何者だ？」

拓也は慎重に女性に尋ねた。

「神裂火織。魔術師です。」

拓也は魔術師と言う科学の街で聞き慣れない言葉に反応していた。

「その魔術師さんが俺なんかは何の用だ？」

「あなたの力を試させてもらいます!!」

神裂と名乗った女性は拓也に向かって日本刀を振ってきた。

「スピリット・レボリューション!!」

拓也はとっさにアグニモンに進化してそれをかわした。

「それがあなたの力なんですね？」

神裂は日本刀をアグニモンに向けながら言った。

「だったら何だ？」

「さっきも言ったはずです。あなたの力を試させてもらいます。七閃！！」

神裂はアグニモンに何かを放ってきた。

「バーニング・サラマンダアア！！」

アグニモンも必殺技を繰り出し技を相殺した。

今ここに炎の闘士と魔術師の戦いが始まった。

第一話【復活】（後書き）

感想待ってます♪

ちなみに不定期更新です

第二話【魔術師】

拓也はアグニモンへと進化して魔術師と名乗る女性…神裂火織と対峙していた。

「七閃!!」

「バーニング・サラマンダアア!!」

神裂が放ってくる攻撃をアグニモンは必殺技を使い相殺していた。

そしてアグニモンは神裂の力に驚いていた。

超能力は知っているがこんな力は知らないからだ。

しかも相手は十闘士でなければデジモンでもない。

ただの人間だ。

魔術師と名乗っているがまだ魔術師を感じさせるような攻撃をしていない。

今神裂がしているのはワイヤーによる攻撃だけだ。

「お前その程度で俺の力を計れると思ってんのか？」

アグニモンは挑発の意味を込めて神裂に言い放った。

「安心してください。まだ力は半分も出していないから」

神裂はアグニモンに告げると突っ込んできた。

人間とは思えないほどの脚力とスピードにアグニモンは驚愕した。

神裂はアグニモンの懷に潜り込むと日本刀を胴体めがけて振るった。

アグニモンはそれを間一髪でかわした。

「ファイヤーダーツ!!」

アグニモンは手の甲から発生させた炎をダーツのように神裂に放った。

しかし神裂は全てを日本刀で叩き落とした。

「ならこれでどうだ!!」

アグニモンは神裂の真上に跳躍した。

「バーニング・サラマンダアア!!」

アグニモンは神裂に向かって炎の球体を放った。

しかし神裂は日本刀で防ぎアグニモンに向かって日本刀を振るった
空中では身動きがとることが出来ずに神裂の一撃を食らってしまった。

だがアグニモンはすぐに体勢を立て直し神裂と向かい合った。

(こいつ強い…)

アグニモンは神裂の懷に潜り込み拳を振るった。

神裂は日本刀の鞘でアグニモンの拳を防ぎ蹴りを食らわせた。

しかしアグニモンは神裂の蹴りを防ぎ神裂の足を掴んだ。

そしてそのまま投げ飛ばした。

「バーニング・サラマンドアア」

投げ飛ばした神裂に向かって必殺技を繰り出した。

しかし神裂は空中で器用に体をしならせアグニモンの攻撃をかわした。

「七閃!!」

神裂はワイヤーによる攻撃の七閃をアグニモンに向かってはなった。

それをアグニモンは跳躍してかわして神裂の着地に合わせて突っ込んだ。

「!?!」

神裂にとっても予想外の攻撃だったため反応が遅れた。

そしてアグニモンの拳が神裂の腹を捉えた。

「ガアアッ!？」

神裂は数mをノーバウンドで吹っ飛んだ。

「やった…か？」

アグニモンが気を抜きかけたその瞬間アグニモンの体が吹っ飛んだ。

アグニモンの体も数mほど吹っ飛び停止した。

「なん…だ…？」

アグニモンはフラフラになりながら自分を襲ったものを確認するた
めに立ち上がった。

そこには神裂が日本刀を抜きはなった状態で立っていた。

「Silver000」

神裂はアグニモンが知らない言葉を話していた。

「私の魔法名ですよ。ここからは本気でいきます」

そう言った神裂からは今まで感じていなかった死の恐怖を感じた。

「だったら俺も本気でいく!!」

そう言ったアグニモンの体をバーコードが球体になり包んだ。

「アグニモン。スライドレボリユーション!!!!」

そう言ったアグニモンからバーコードの球体がなくなった。

しかしそこにいたのはアグニモンでなく炎のような翼を広げ尾を持ち赤い装甲をまとった姿。

その姿は魔龍を連想させる姿だった。

「ヴリトラモン!!!」

この姿は炎の闘士がビースト体になった姿だった。

その姿はヒューマン体の力の非ではなかった。

「驚きましたね。まるで龍のようですね」

だが神裂の表情は全く変わっていない。

「龍みたいじゃなくて龍なんだよ!!!」

ヴリトラモンは翼で羽ばたき神裂に突っ込んだ。

神裂も魔法名を名乗ったことにより動きにキレがついていた。

「コロナブラスタアア!!!」

ヴリトラモンは腕についた発射口から炎の縦断を神裂に向かってはなった。

しかし神裂は避けようとしなかった。

「唯閃！！！」

神裂は今までのワイヤーでの攻撃でなく次元を断ち切るような一撃がヴリトラモンの一撃を粉碎した。

しかし神裂の一撃は威力を下げることなくヴリトラモンに向かってきた。

「ッ！？」

ヴリトラモンはかれうじて体勢を変えて神裂の一撃をかわした。

だが体勢が崩れた事によって地面に墜落した。

そんなヴリトラモンに向かって日本刀を振りかざした神裂が突っ込んできた。

「グオオオオオオオ！！」

ヴリトラモンは獣のような雄叫びを上げた。

「フレイム・ストオオオム！！」

ヴリトラモンは炎の竜巻を発生させ突っ込んできた神裂に放った。

神裂は構わずヴリトラモンの放った炎の竜巻に向かってきた。

「何だと！？」

ヴリトラモンは神裂の行動に驚いた。

そして服のところが焦げた神裂が炎の竜巻の中から現れた。

そして神裂は日本刀をヴリトラモンに向かって振り落とした。

だがヴリトラモンは腕についている発射口で神裂の一撃を防いだ。

ヴリトラモンは回転して神裂の横腹に自分の尾を叩きつけた。

「ぐっ!？」

神裂はヴリトラモンの一撃を受けて近くの建物に激突した。

「これで終わりだ! フレイム・ストーム!!」

ヴリトラモンは神裂に炎の竜巻を放った。

それに対して神裂は一撃必殺の唯閃を放った。

二つの技が激突してその衝撃がヴリトラモンと神裂を襲った。

「「ぐああああ!？」」

二人は衝撃を受けて絶叫した。

そしてヴリトラモンの進化が解けて拓也の姿に戻ってしまった。

すでに拓也の体はボロボロで動くこともままならなかった。

そんな拓也に日本刀を杖代わりにした神裂が近付いてきた。

「お見事です。神原拓也」

拓也の予想に反して神裂の口調は優しかった。

「俺を殺さないのか？」

拓也は疑問を神裂に言うのと神裂にクスクスと笑われてしまった。

「最初に言ったはずです。力を試させてもらいますと」

その言葉でようやく体から力が抜けた。

そして神裂が拓也に手を差し伸べた。

拓也は神裂の力を借りて立ち上がることが出来た。

そして神裂の顔が真剣なものになった。

拓也はまだ戦うのかと思ったが違うらしい。

「あなたに話があります。」

「何だ？」

拓也は戦いでないのならば話を聞くつもりだった。

「実はあなたにパートナーになってもraitたいのです」

拓也は神裂の言葉にキョトンとしてしまった。

「あんたの？」

神裂は首を横に振って言った。

「私の友達のインデックスのです」

「……………目次の？」

拓也は少し間を開けて聞いてしまった。

「違います。名前の由来は禁書目録と言う意味です」

拓也は適当に相づちをついて神裂の話聞いた。

「彼女の頭には10万3000冊の魔導書が記憶されています」

魔導書と言うのは魔術が刻まれた書籍の事である。

「彼女はその魔導書のせいで他の魔術師から狙われています。だからあなたが守ってください」

神裂の言葉に拓也は新たに疑問を覚えた。

「だったら同じ魔術師のあんたが守ればいいじゃねえか？」

拓也の疑問もまったくだった。

しかし拓也に頼んだのはちゃんとした理由があった。

「最近では魔術師だけでなくさっきのような怪物も彼女を狙っています。私達ではあれを完全に倒すことは出来ないんです」

拓也はここでようやく何故自分に頼んだのかを理解した。

神裂が言っている怪物とはデジモンの事である。

おそらく神裂は拓也が進化してデジモンと戦い勝利し唯一デジモンを倒せる存在として拓也に頼んだのだ。

「いいけどよそのインデックスとやらはどこにいるんだ？」

拓也の問いに神裂は困ったような顔をしてしまった。

「もしかして分かんないの？」

拓也が恐る恐る聞くと神裂は頷いた。

拓也はため息をついた後神裂に言った。

「じゃあ俺もインデックスを探すから見つけたら教えてくれ」

拓也は自分のケータイ…デジヴァイスのアドレスを教えて神裂の元を去っていった。

そして神裂は拓也に隠していることがあった。

インデックスは一年周期で記憶を消さなければ死んでしまうと言う

ことを。

そして残り数ヶ月でその周期が来てしまうと言っていることを。

第二話【魔術師】（後書き）

感想待ってます♪

第三話【通信】（前書き）

今回はこの物語のヒロインが登場します!?

それではどうぞ!!

第三話【通信】

拓也は夜の道をぐったりとしながら歩いていた。

実に今日だけで今までの中学生生活を越す勢いでイベントが発生していた。

人間界にデジモンが現れたり魔術師【神裂火織】と戦うなどの事があつたのだ。

そんな事を考えながら自分の寮に戻った拓也の部屋からは光が漏れていたのだ。

（誰だ？まさか…）

拓也は嫌な予感を感じながらも寮のドアを開いた。

玄関には乱雑に靴が置かれてあつた。

そして自分の部屋に入るとそこには一人の少女がいた。

「おっすお邪魔してるぞ？」

この少女は【波香なみかまい舞】

長い綺麗な髪をポニーテールでまとめている。

【神裂火織】の半分ほどの長さである。

性格は男勝りの大ざっぱな性格。

二年前の事件で知り合った少女だ。

ちなみに拓也がデジモンに進化できることを知る数少ない人物だ。

「おっすじゃねえよ。何しに来たんだ？」

「決まってるじゃん」

舞はそう言ってポケットからあるものを取り出した。

それは拓也の赤いデジヴァイスとは違う黒いデジヴァイスだった。

「何で舞がデジヴァイスを！？」

拓也は本当に驚き聞いてしまっていた。

黒いデジヴァイスは【源光一】と言う人物が持っていたデジヴァイスなのだ。

「さあ？いきなり私のケータイがこれになったのよ。あんた何か知らない？」

「俺はオフアニモンから通信がきてデジヴァイスになったんだ」

二人は何故舞のケータイがデジヴァイスに変化してしまったのか考えた。

舞は二年前の戦いには参加していないのだ。

他の五人ならわかるが何故舞なのかと考えた。

そこで二人のデジヴァイスの画面が光り出した。

「な、何!?! 何これ拓也!?!」

舞は思いっきり動揺していたが拓也にはこれが何の合図か分かっていた。

「オフアニモン、今世界に何が起こってるんだ?」

拓也が問いかけると二つのデジヴァイスの光が空中で交差した。

そしてその中からホログラムのような映像が現れた。

そこに映っていたのはオフアニモンだった。

「お久しぶりです。拓也さん」

「そんな事よりいま世界に何が起こってるんだ?」

拓也が聞くとオフアニモンは話し始めた。

オフアニモンの話によるとデジタルワールドがルーチェモンから救われて数ヶ月は平和が続いていた。

しかし突如デジタルワールドに大規模な地震が発生するようになった。

そして地震によって発生した亀裂に落ちたデジモンは人間界にたどり着いていた。

そこで誰かに何かを吹き込まれ【禁書目録】をねらい始めたと言うことだった。

「なんでデジモン達は【禁書目録】を狙っているんだ？」

「それは私にもわかりません。ですが【禁書目録】はデジモン達の手に渡してはいけません」

二人の話についていけなくなっていた舞はデジヴァイスをいじって遊んでいた。

「もう一つ聞きたいんだけどなんで舞がデジヴァイスを持っていたんだ？」

拓也がオフアニモンに聞くと舞がこちらに顔を向けた。

そして興味津々ですとばかりに話に混ざってきた。

「舞さんにデジヴァイスを与えたのは源光一さんの代わりに与えました」

どうやら光一は何故かスピリットの力を使えなくなっていたようだ。

その代わりに舞が闇のスピリットを使えるようになっていたらしい。

他の四人にも通信を試みているが二年前の事件から人間界とデジタルワールドとの通信がやりにくくなっているらしい。

だから今デジモン達と戦えるのは拓也と舞だが地質的には拓也しか戦えないのだ。

「大体事態は分かったけどデジモン達は全員倒さないといけないのか？」

「残念ですが今はそれしか人間界に迷い込んだデジモン達をデジタルワールドに返す方法がありません」

拓也はそうかと呟いた。

どうやら通信も限界らしくオフアニモンを映し出したホログラムが消えかけていた。

「何か分かったことがあったらお伝えします」

「頼むよ」

オフアニモンは最後にそう告げると消えてしまった。

デジヴァイスからも光が消えてしまっていた。

「はあ…まさか舞が十闘士に選ばれるなんてな」

拓也は横目で舞を見ながらため息をついていた。

そんな拓也の態度が坎に障ったのか舞は頬を膨らませて怒っていた。

「私だって戦えるもん!!」

舞は拓也の首に手を回しながら言った。

「分かった、分かったから離せ!!」

拓也が思いっきり叫ぶと舞は離してくれた。

舞は用事を済ませたからなのかさっさと帰って行った。

「何なんだあいつ…」

拓也は舞に対する不満があったが今日あった出来事のせいで睡魔が拓也を襲った。

そして自分の意識を睡魔に任せて眠りについた。

【神原拓也】

柵川中学一年生

身長165cm

体重52Kg

炎のヒューマンスピリットとビーストスピリットを所持している。

【波香舞】

常盤台中学一年生

身長153cm

体重???Kg

LEVEL3の空間移動能力者

闇のヒューマンスピリットとビーストスピリットを所持している。

第三話【通信】（後書き）

次回は遂にあの人が出ます！！

感想待ってます！！

後作者が書いている

【とある悪魔が絶対能力者】

【とあるアンチスキルの義理の妹】

花月十夜さんが書いている

【魔術と科学と学園都市】

【とある妹と学園都市】

hayateさんが書いている

【とある異世界の錬金術師】

【とある異世界の武器操者】

などを見ていない人はみてください！！

おすすめです！！

感想待ってます！！

第四話【禁書目録】（前書き）

今回はサブタイトルのとおりあの人が登場します!!

それではどうぞ!?

第四話【禁書目録】

アグニモンとなりデジモンと戦った次の日拓也は布団からでるのが嫌だった。

異常なまでに睡眠量が足りていなかった。

学校をさぼるわけにもいかなかったので拓也は嫌々布団から体を起こした。

「はぁ…こんなんで大丈夫か？」

進化して二回戦っただけでここまで疲労が来るのでこれから戦っていったらどのくらいの疲労がたまるのかなと想像していた。

「考えるのはやめよう！！そろそろ学校行くか！！」

拓也の通っている柵川中学は歩いて数分の距離にある。

しかし拓也はコンビニによって朝ご飯を買うために早めに出た。

（禁書目録ってどんな奴なんだ？）

神裂に特徴を聞いていなかったためどんな姿をしているか知らないのだ。

そんな事を考えながらコンビニに入った。

（弁当にパンに飲み物に…そう言えば今日はジャンプの発売日だっ

けなあ)

拓也は買い物籠に昼飯分の食料を入れて本売場に向かった。
どうやら朝発売したばかりらしくきれいに並べられていた。

その中の一冊をとり拓也はページをめくった。

拓也が最初に見るのはいつもBLEACHを先に見てしまう。

その理由はいずれ判明するだろう。

(今回もなかなかだったなあ。まだ時間あるけどそろそろ行くか…)

拓也はジャンプも買い物籠に入れて会計に向かった。

今朝の出費は1500円を余裕にこえていた。

拓也はカバンに買ったものをしまつて学校に向かった。

学校につくとクラスはとある話題で持ちきりだった。

「拓也お前昨日どこ行ってたんだよ？」

「もうあれはすごかったぜ!!」

本城と債鬼がなにやら興奮した様子で拓也に話しかけた。

拓也は事態が把握できずに混乱するしかなかった。

「落ち着けお前ら！何があったか説明しろ！！」

すると二人は信じらんねえと言う顔になった。

「お前朝のニュース見てないの？」

「拓也が見る訳ねえだろ？本城」

やれやれと二人はため息をついた。

そして一枚の新聞の記事を拓也に見せた。

「何これ？」

「まず見てみる」

債鬼に言われ拓也は渋々と言った感じで新聞の記事を見た。

そこにはでかかとかこう書かれていた。

【赤の魔神が怪物から街を救った！？】

と書かれていた。

そしてその記事の下に特大サイズの写真が貼られていた。

そこに写っていたのは拓也が進化した姿【アグニモン】だった。

（な、なななんだこれ！？）

拓也は心の中で猛烈に叫んでいた。

「あれはすごかったなあ」

本城が言うところのクラスの大半が同意していた。

しかし拓也はこそばゆい感じがするだけだった。

進化しているとはいえあくまで【アグニモン】は拓也なのだ。

「そんなにすごかったのか？」

「すごい何のってあの怪物を一人で倒したんだぜ！？すごいなんでもんじゃねえよ！！」

債鬼が再び興奮気味に叫んでいた。

「赤い魔神ってLEVELいくつなのかな…？」

本城が口にした言葉だったがそれは拓也にとっても気になるところだった。

（アグニモンならLEVEL4くらいでヴリトラモンならLEVEL5くらいかな？）

そんな事を考えていると担任が来てHRが始まった。

担任の話でもやはり炎の魔神（拓也）の事についてだった。

拓也は若干後ろめたい気持ちを持ちながらHRが終わった。

（バレたら大変だなこりゃ…）

拓也は絶対に見つからないようにしようと心に誓った。

授業が始まってやはり一度は赤い魔神（拓也）の話題について盛り上がる。

さらに四時限目では一時間かけてみんなで赤い魔神（拓也）について語り合っていた。

（はぁ…恥ずかしい…）

赤い魔神（拓也）はどうやら今をときめくアイドル並の扱いのようだった。

そして昼休みになり拓也は本城と債鬼と昼飯を食べていた。

そこでも聞かされるのは赤い魔神（拓也）についてだけだった。

「だからあの方は学園都市の救世主なんだよ！！分かりますか拓也くん？」

「へいへい分かりましたよ債鬼くん？」

拓也は今日ほど学校をサボりたいと思った日はなかった。

「そう言えば拓也あのとどこ行ってたの？」

拓也は本城に聞かれてドキッとしてしまった。

口が裂けても戦ってましたなんては言えない。

「俺は全速力で逃げてたよ」

拓也は嘘をついたが二人は疑っている様子はなかった。

何故なら普段から拓也は不良に絡まれるが一目散に逃げていくからだ。

その後も債鬼と本城に赤い魔神（拓也）について話されて五時限目の授業が全く頭に入ってこなかった。

（はぁ…眠い眠い眠すぎる…）

拓也はその授業の間無自覚の間に寝てしまっていた。

そして帰りの時間になった。

拓也、本城、債鬼の三人は帰宅部のために部活はなく下校しようとしていた。

「拓也ゲーセン行こうぜ!!」

「ああ良いぜ。あんま金ねえけど」

これは嘘だった。

この二人は拓也が金持っていると分かったら拓也の金にまで手を付けてしまうからだ。

「また会えるんじゃない？！」

「そう何回も会える訳ねえだろ」

拓也が適当に答えると前を歩いていた二人がいきなり立ち止まった。

そして後ろを歩いていた拓也は二人にぶつかってしまった。

「何止まってんだよ？」

「「…」」

「おーい生きてるかあ？」

拓也は冗談を言っていると二人が一点を凝視していた。

拓也も見てもみるとそこには白い修道服に身を包んだシスターがいた。

いや正確には倒れていた。

「おい拓也、債鬼どうするこれ…」

本城は道の真ん中に倒れているシスターを指差しながら言う。

「ここはひとまずスルーだな」

拓也の意見に賛同した二人だった。

そしてシスターの脇を通り抜けようとして隣を通った瞬間シスター

の体がビクツと動いた。

「「「うわっ!?!」」」

三人は同時に叫び飛び退いてしまった。

「（お、おい生きてるぞ!?!? どうする債鬼!?!?）」

「（俺に聞くな!?!? こういう時こそ本城だれ!?!?）」

「（押してけるな!?!? ようしここはジャンケンで誰が話しかけるか決めるぞ）」

本城の意見で誰がシスターに話しかけるかジャンケンで決めることになった。

「「「最初はグー、ジャンケンポン!?!?」」」

拓也グー、債鬼パー、本城パーの結果になった。

決まった瞬間二人はダッシュでその場から逃げ去った。

一人残された拓也は律儀にもシスターに話しかけた。

「あ、あのーシスターさん? どうしたんですか?」

拓也は恐る恐るシスターに尋ねた。

「...お...」

「お？」

「お腹すいた…」

シスターから出てきた言葉に拓也は咄然とした。

そして偶然にも債鬼の話によって食べられなかった弁当が一つあった。

「弁当食べますか？」

拓也が聞いた瞬間シスターはものすごい勢いで起き上がり拓也に顔を近づけた。

「本当!？」

「ほ、本当本当…」

拓也がカバンから弁当を取り出して渡すと凄まじいスピードで弁当を食べ始めた。

シスターをよく見ると銀髪碧眼のなかなか整った顔立ちをしていた。年にすれば11から12歳くらいだろう。

「君、名前なんて言うの？」

シスターは弁当を食べる手を止めてご飯粒がついた顔を拓也に向けて言った。

「私は禁書目録インデックスって言うんだよ」

拓也はシスターの言葉に驚いていた。

まさかインデックスがこんな行き倒れシスターだとは微塵も思わなかったからだ。

「なんでインデックスはあそこに倒れてたんだ？」

「ちょっと逃げ回りすぎてお腹が減って動けなくなっただよ」

インデックスの言葉に拓也は呆れるしかなかった。

だが拓也は一つ気になる部分があった。

「誰から逃げ回ってたんだ？」

「それは…」

インデックスが言う前に謎が解けてしまっていた。

何故なら空から凄まじい叫び声が聞こえたからだ。

その叫び声の主は緑色の体に鳥のような骨格をした巨大なデジモンがいた。

そいつの名は【パロットモン】

完全体のデジモンだった。

「君！！早く逃げて！！あいつの狙いは私だから！！」

インデックスは拓也に叫んだ。

だが拓也は動くわけにはいかなかった。

「逃げるのはお前だ。インデックス。ここは俺に任せろ」

「君じゃあいつには勝てない！！！！」

インデックスは拓也に叫び続ける。

「まあ見てろって♪」

拓也はインデックスにそう言ってポケットからデジヴァイスを取り出した。

そして拓也の手にバーコードが現れた。

「スピリット・エボリューション！！！！」

拓也の体がバーコードの球体に包まれた。

そしてバーコードの球体が晴れたときそこには炎の闘士【アグニモン】がいた。

「さあ行くぜ！！」

アグニモンはパロットモンに向かって走り出した。

第四話【禁書目録】（後書き）

次回はアグニモンVSパロットモンです！！

お楽しみに！！

ところでレーベモンの技って何でしたっけ……？

第五話【緑の翼竜】（前書き）

タイトルはリオレイアとは全く関係ありません…

ではどうぞ!?

第五話【緑の翼竜】

突如として現れたデジモン【パロットモン】を倒すために拓也は進化して【アグニモン】となり立ち向かっていた。

このパロットモンはインデックスを狙いここまで来たのだ。

「しつこいと嫌われるぜ!!」

アグニモンは跳躍してビル十階分くらい飛んだ。

そしてその勢いのままアグニモンはパロットモンの顎に蹴りを食らわせた。

不意打ちを食らったパロットモンは驚き体勢を崩した。

「まだまだあ!!」

アグニモンは体勢を崩したパロットモンに追い討ちをかけた。

蹴り上げた足で勢いをつけてもう片方の足で蹴りを食らわせた。

「グエエエエ!!」

しかしパロットモンはアグニモンに翼を打ちつけた。

「グッ!？」

パロットモンに打ちつけられたらアグニモンはビル十階分の高さか

ら勢いをつけて落とされた。

だがアグニモンは空中で体勢を立て直し着地した。

その着地点めがけてパロットモンが【ミョルニルサンダー】を放った。

この技は高圧の電撃を相手にぶつける技だ。

「危ない君!？」

インデックスは悲鳴に近い叫びをアグニモンにぶつけた。

だがそんな心配はなかった。

「バーニング・サラマンダアアア!!」

アグニモンは両腕から発生した炎を拳を振るい球体のように飛ばした。

一撃目はパロットモンの攻撃を相殺して二撃目はパロットモン本体を捉えた。

しかしあまりに距離があったため当たるときにはすでに威力はほとんどなかった。

そしてパロットモンはあざ笑うかのようにアグニモンに突っ込んできた。

避けることも出来るが後ろにはインデックスがいる。

アグニモンは避けずにパロットモンの軌道を変えることにした。

「キュエエエエエ!!」

パロットモンは雄叫びを上げて嘴をアグニモンに突き刺そうとした。

アグニモンはパロットモンの嘴を脇で掴み勢いを殺そうとした。

しかし体格差がありすぎるため完全には殺しきれない。

「ハアアアア!!」

アグニモンはパロットモンの嘴に掴まったまま空中に飛んだ。

その軌道はギリギリインデックスを避けるように変えることが出来た。

「危ねえんだよコノヤロオオ!!」

アグニモンは拳に力をためて思いっきりパロットモンの眉間を殴った。

するとパロットモンはいきなり急停止してアグニモンは放り出されてしまった。

いきなりの事だったため反応が間に合わずそのまま地面に叩きつけられてしまった。

「痛ってえな…」

アグニモンは頭をさすりながら起きあがると衝撃が体を襲った。

「ガッハッ!？」

口の中に鉄の味が広がった。

パロットモンは【ソニックデストロイヤー】と言う風の砲弾を放ってきたのだ。

「キュエエエエエ!!」

パロットモンは怒りの雄叫びを上げて倒れているアグニモンに襲いかかった。

「あんまり調子に乗るなよ!!」

アグニモンは二つの拳を互いにぶつけた。

すると両腕から炎が溢れ出てきた。

「バーニング・サラマンダアア!!」

アグニモンは炎の球体を突っ込んでくるパロットモンに一発放った。

だがパロットモンはそれを避けた。

「もういっちょ!!」

アグニモンはもう一つの炎の球体を放った。

今度は避けきることが出来ずに直撃した。

「グエエエ…グエエエエー!!」

パロットモンは絶叫してアグニモンから再び距離を置いた。

そしてそのまま逃げ去ろうとする。

だがそんな事を許すわけがなかった。

「逃がすか!! アグニモン・スライドエボリューション!!」

そう叫ぶとアグニモンがバーコードの球体に包まれた。

「ヴリトラモン!!」

バーコードの球体から現れたのはビースト体のヴリトラモンだった。

ヴリトラモンは翼を羽ばたかせてパロットモンを追いかけた。

いきなり姿が変わり自分を追いかけてくるヴリトラモンにパロットモンは驚愕していた。

「食らえ!! コロナ・ブラスタアア!!」

両腕についている発射口から炎の銃弾を連続で放つ。

それを食らったパロットモンはバランスを崩して落下した。

しかしその先には二人の少女がいた。

「危ねえ!？」

ヴリトラモンは急降下して少女達とパロットモンの間に入り少女達を助けた。

「大丈夫か!？」

ヴリトラモンはとっさに二人の少女の安全を確認しようとしたが今はビースト体になっているためヴリトラモンもパロットモンもただの怪物にしか見えない。

ヴリトラモンはパロットモンを投げ飛ばして地面に降り立った。

「ヴリトラモン・スライドエボリューション」

ヴリトラモンを再びバーコードの球体が覆った。

そして次に晴れたときアグニモンになっていた。

「あっテレビに出てた赤い魔神さんだ」

髪が長い活発そうな女の子が指さしていた。

もう一人の頭に花飾りをつけている少女は恐怖で固まっていた。

「ここは危ない。安全なところに避難しよう」

そう言ってアグニモンは二人の少女を抱きかかえて走り出した。

そしてパロットモンから大分離れたところに二人をおろした。

「ここから早く離れるんだ」

アグニモンは二人の少女に告げて再びパロットモンの元に戻った。

「待たせたな」

パロットモンにそう告げたアグニモンは回転し始めた。

するとアグニモンを中心に炎の竜巻が現れた。

そしてそのまま炎の竜巻はパロットモンに向かっていく。

「サラマンダアアブレイク!!」

アグニモンは炎の竜巻の中から現れパロットモンの顔に回し蹴りを食らわせた。

するとパロットモンからバーコードが現れた。

「デジコード・スキャン」

アグニモンはデジヴァイスでパロットモンのバーコードを吸収した。

そしてデシタマになったパロットモンはどこかへ飛んでいってしまった。

「ふう〜なんとかやったってどこか。インデックス迎えに行くか…」

周りに誰もいないことを確認するとアグニモンは拓也に戻った。

そして拓也はインデックスの元に走った。

インデックスを見つけた場所は最初に会った場所だった。

「よっインデックス」

拓也は片手を軽く上げてインデックスに話しかけた。

「君、怪我はないの!？」

インデックスは拓也に怪我がないか確認するために近寄ってきた。

「大丈夫だ。それに俺は君じゃなくて【神原拓也】だ」

「拓也? さっきのは何？」

インデックスは進化の事を言ったのだろう。

そしてインデックスに進化のことデジモンの事を教えた。

「そうなんだ…」

「そう言えばお前どこ住んでんの？」

するとインデックスはないと答えた。

どうやら今まで野宿暮らしだったらしい。

「なら俺ん家来いよ」

「いいの？」

「もちろん!!」

拓也が言うといンデックスがありがとうと抱きついてきた。

なかなか可愛い奴だなと拓也は思ってしまった。

そして拓也はデジヴァイスを取り出して神裂に連絡しようとした。

「神裂さん。インデックス見つけました」

するとデジヴァイスの向こうで何かが碎ける音が聞こえた。

「どうしたんですか？」

拓也が何かが碎ける音に不思議に思って尋ねた。

「な、何でもありません。すぐにそちらに向かいます！」

神裂は焦りながら拓也に伝えて通信を切った。

そしつ神裂はおそらく拓也の寮に来るはずなのでインデックスを連れて寮に帰ることにした。

この時すでに空が暗くなってきた。

第五話【緑の翼竜】（後書き）

感想待ってます♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6725/>

とある魔術とフロンティア

2010年10月11日21時46分発行